海岸線から元気になる日本「海のグリーン・ツーリズム」マガジン

TEAM 浪-江戸 Presents

Coast Paddlers

◆TEAM 浪-江戸 faces

八幡(やはた) 暁(さとる)
冒険家
Satoru Yahata

日本人の自然観の回復と、進化した文明の形をつくりたい

向山(むこうやま) 潔(きよし)
彫刻家
Kiyoshi Mukoyama

「未知と未来」こそが、奇跡の星の住人としてのドライビング・エナジー

磯(いそ) 暢秋(のぶあき)
カヤック・フィッシング探検隊
Nobuaki Iso

いくら与えたところで、誰もお父さんを尊敬なんてしません

◆特集

TEAM 浪-江戸・発進!
解剖・Coast Paddlers

人と自然を海岸線でつなぐ
最新・海のエコ旅いざ発進!!

FREE!
ご自由にお取りください

vol.00 創刊準備号

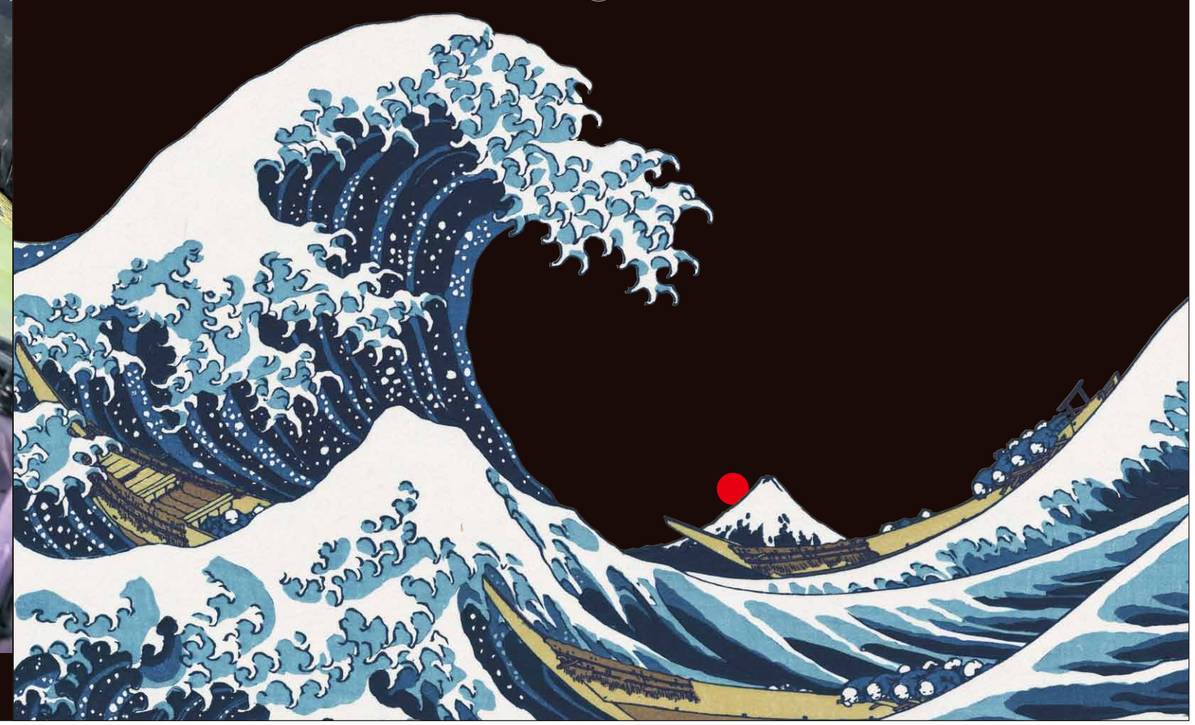
海岸線から元気になる日本「海のグリーン・ツーリズム」マガジン Coast Paddlers vol.00 創刊準備号

シー・カヤックで挑む新酒番船

NAMI-EDO 500 CUP

浪-江戸500杯

2013年9月初酒御蔵出(予定)



TEAM 浪-江戸・発信!!

誰でも挑戦でき、誰でも頂点を目指せる場、それが大海原

ごあいさつに代えて

◆新酒番船と江戸日本

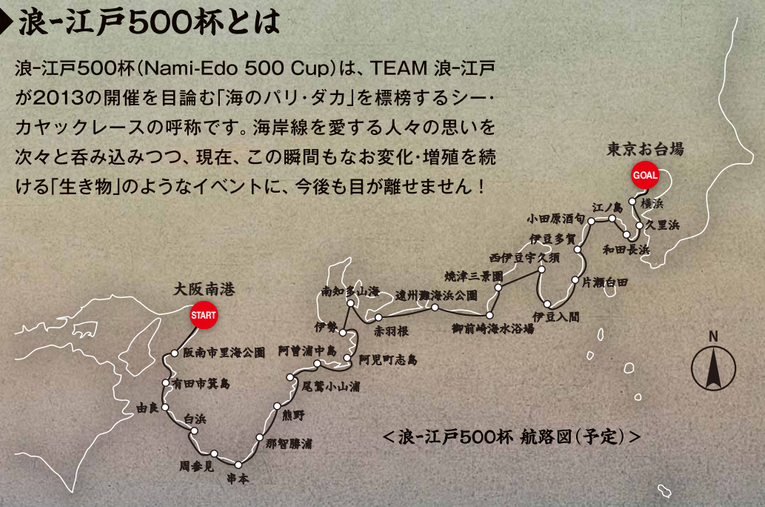
元禄のむかし、上方・江戸の市民が湊に殺到する一大イベントがありました。
酒や綿の初物争いを起源とする番船レースです。中でも新酒の季節、命知らずの水主(かこ)どもが樽廻船を繰り出し、先を争って上方の初物を江戸に届ける一番乗りレースは国中の語り草になるお祭り騒ぎ。有名なイギリスのティー・クリッパー船「カティ・サーク」による中国ーロンドン間の紅茶の初物レースに先立つこと170年、以来、江戸期を通じ、大海渡りに命を捧げる水主の群れが、日本人の飽くなき冒険心を刺激し続けました。

◆TEAM 浪-江戸とは

ひるがえって現代の日本、人々の目に輝きなく、生きるチカラも喪失、閉塞感ばかりが国中に充満しています。とても同じ民族とは思えないほどの変わり様といえるでしょう。現前の海岸線からは多様性も旅の魅力も失われ、画一的な海浜をブイで仕切った「海水浴場」という名の塩辛いプールでごった返すか、少なくない費用と化石燃料を投じて大がかりな装置に乗り込み海を足蹴に走り去るかの二者択一、といった様相を呈しています。人々の心が海から離れていくのは、理の当然といえるかも知れません。
2011年、そんな日本の現状に危機感を覚えた各界の有志が集結、TEAM 浪-江戸を結成しました。シー・カヤックの利用を前提とした様々なイベント活動や教育支援、刊行物の発行を通して、「自然を体感しつつ育ち、かつ生きること」の重要性や、海岸線の魅力を訴え、臨海地域の伝統を辿りつつ、身の丈に応じたリスクを進取する冒険の旅のすばらしさを、日本中に、世界中に発信していくことを旨に、走り始めます。
当初は、ごく少人数のささやかな集まりでしたが、周辺に檄を飛ばしてみたところ、驚くべきことに9割以上の方々から、ほぼ全面的なご賛同と、参加のご意思を伝えられました。
「この途方もない反響を、少数の愚痴大会で終わらせるわけにはいかない」
多種多様な職業、趣味、性格の持ち主たちによって結成されたTEAM 浪-江戸は、こうして動き出しました。

◆浪-江戸500杯とは

浪-江戸500杯(Nami-Edo 500 Cup)は、TEAM 浪-江戸が2013の開催を目論む「海のパリ・ダカ」を標榜するシー・カヤックレースの呼称です。海岸線を愛する人々の思いを次々と呑み込みつつ、現在、この瞬間もなお変化・増殖を続ける「生き物」のようなイベントに、今後も目が離せません！



＜浪-江戸500杯 航路図(予定)＞

◆TEAM 浪-江戸、浪-江戸500杯の最新情報は

☞ www.nami-edo.jp

八幡(やはた) 暁(さとる)

冒険家 *Satoru Yahata*

Profile

冒険家。グレートシーマン・プロジェクト実行者。「海遍路」コア・メンバー。通称・番頭。
カヌーツアー「手漕屋素潜店 ちゅらねしあ」代表。
「潜れる海があれば死なない」をテーマに、数々の世界初となる航海記録を打ち立て、MBS・TBS「情熱大陸」等、多方面のメディアに出演するなど、シー・カヤック界一ホットな男。TEAM 浪-江戸 理事。

日本人の自然観の回復と、進化した文明の形をつくりたい

～僕がTEAM 浪-江戸で実現したいこと～

日本は、ダイナミックに変化する自然のただ中にあります。季節の変動めまぐるしく、雨が降り、風が吹き、海流が押し寄せ、山が火を噴き、つねに地面が動く国です。この与(くみ)し易(やす)からぬ自然との関わりの中で、恵みをいただき、共有し、知恵を絞って、人は生き抜いてきました。
現代の日本は、高度に文明化し、産業が栄え、くまなく衣食住が行き渡ったようにも見受けられます。この進歩は素晴らしい。飢えを遠ざけた先人の努力の数々は、まさしく評価に値すると思います。しかし反面、人知の及ばない自然の中で、しぶとく生き抜く強さが、急速に失われつつあるようにも思えます。僕たちは、科学がどれだけ進歩した社会にあっても、地球という、人の手に負えないスケールの自然に支えられて生きています。その暮らしぶりが、周囲の環境や、同じ地球上の他(よそ)所の場所での暮らしを破壊することによって成り立っている事実から目を背けてみたところで、結局は自然の理(ことわり)と共に、生きていかなくてはならないことに変わりはありません。
これから世界は、文明が自然を破壊する時代から、自然と調和する時代へと移行していくでしょう。日本は元来、そうした文明に拠って立つ国でした。ふたたび世界に向けて「人と自然がつながる姿」を現出してみせ、真の誇りと心の豊かさを取りもどしたい。
浪-江戸では、さまざまな活動や旅を通してこれまで自分が見てきたこと、感じてきたこと、経験してきたことをベースに、日本人の自然観の回復と、進化した文明の形をつくる一役を担えれば、と考えています。

向山潔

むこうやま きよし

彫刻家 Kiyoshi Mukoyama

「未知と未来」こそが、奇跡の星の住人としてのドライビング・エナジー

～私がTEAM 浪-江戸で表現したいこと～

この空や海が、境目なく、どこまでもつながっているように、時もまた、過去から未来へと連続しています。川の流れのように、この瞬間を超え、今ある自分という意識さえ呑み込んで、命の起源から放たれたことばを遥かに伝えながら、かたときも一所(ひとところ)にとどまることなく脈動を続けます。

太古の文明にあっては、荒くれた自然と、灯(ともしび)にも似た可憐極まる存在の哲学を通じて、かろうじて人は自己の極小観を得、形而上的観念を育んできました。文明を宿し、科学を紡いで、地球人であることを意識するに至った我々が、惑星外での生命存続の可能性や、他の惑星の地球化すら、なかば大マジメに語り始めた背景には、地平を無制限に延長する過程で獲得した「いかに危うい偶然によって今をつないできたことか」との無意識下での確信があり、さらに自分たちの振る舞いさえ制御し得ない現前文明に対する不信と失望が横たわっています。が、同時に、我々は「どこまでもつながること」そのものが生命のミッションであって「未知と未来」こそが、奇跡の星の住人としてのドライビング・エナジーとなってゆくことを知っています。遙か遠方の未来に恐懼するのではなく、すぐ鼻先に迫り来る未来に託す、という行為は、世界のいっさいに期待することなく、しかし、いっさいの希望を捨て去ることもない、という、四十億年の態度に立ち返ることを意味します。では同じ要領で、ほんの少し過去に遡上する場合はどうでしょうか。「江戸」というこの国の時空軸を見つめるとき、時代に対する憧憬に終始するより、自己への脈絡を探ることの方が、より強い動機付けと、意味をもたらすことは自明です。ゆえに「旅立ちへの衝動が、水を通して人と時空をつなげ、大洋のエネルギーを受容し命の波動を伝言するとき、もしくは躍動する旅への企てが自然へのオマージュに昇華するとき、物質指向を超えた『世界への在り方』が我々に啓示されるかも知れない―。」と、そうした既視感ある未来への予感を、どうしても拭い去ることができないのです。

そもそも誰のものでもないはずの海を、高速料金もガソリン税も要求されることなく取り戻すことは、単に国民の権利を主張する行為ではありません。誰のものでもない惑星への態度、持続可能な未来への作法を獲得することに直接リンクしているのです。人間にとって自然はどこまでも大らかで寛容で、ただ現前と広がるライフフィールドですが、まず海に出ると陸からの文明がゴミとして流出していることに気がつきます。“海からでたゴミ”などはなく、その場の人間にとって不都合なものをそう呼ぶことがあるだけであり、本来海から出たものは海に還ってゆくだけです。それだけに、陸の我々が海に向き合うとき、正面から対峙すると自身が異物のように意識されます。もの思う大きなゴミ、というわけです。が、力を抜いて漂うと、にわかに世界とリンクしたかのような安堵感に包まれます。漁師が漁もないままにただ海をみつめていたり、海水浴客がただ波打ち際に足を漬けているだけでチャージされる、例えようのない無限のエネルギー。陸ではあふれる情報の海が等身大のフィールドワークを阻んでいますが、本物の海は古来、万人に開かれてます。閉塞感にあふれる日常を批判し合っていても、何ら変わるところはありません。心の荒野にたたずんで、何かにリンクされますか？何かがチャージされますか？海はあなたをつなげます。下向いてないで、拓いていこうぜ！つないでいこうぜ！交わってつながって漕ぎ進んで行こうぜ！

Profile

彫刻家。造形作家。ARTVOICE代表。
EXPO'90国際花と緑の博覧会、扇町公園、淡路花博（奇跡の星の植物館）、静岡花博、可児公園（花の地球館）等の著名プロジェクトや北海道立旭川美術館等に出展。造形を通じた人と自然の関係構築をメインフレームに活動中。TEAM 浪-江戸 理事。

礒 暢 秋

カヤック・フィッシング探検隊

Nobuaki Iso

いくら与えたところで、誰もお父さんを尊敬なんてしません

～僕がTEAM 浪-江戸で実行したいこと～

子どもの頃、僕は近くを流れる川でよく遊びました。流れが強く、生き物もたくさんいて、冒険する上で事欠かない。いま思い出しても、楽しくなってくるほどです。お目当ては自然観察やバードウォッチング･･･ではなく、魚やザリガニといった流れに棲む生き物を獲りたい、ただそれだけです。ところが、これがまた獲れない獲れない(笑)そこが子どもの悲しさ、思いばかりが空回りして、網を出そうが竿を出そうが、いっかな目当ての大物が手に入らない。そんなある日、近所に住んでいた、ちょっとおっかない中学生のお兄さんが、僕のすぐ隣で竿を出しました。と、見る間に一匹、二匹と釣り上げていきます。「すげ～！ オトナって、すっげ～!! 」ただの中学生なんですが、小学生当時の僕の目からは、お兄さんも立派なオトナの仲間だったんですね(笑)ヒーロー誕生の瞬間、というわけです。ともあれ僕は、そんなところからオトナ、目上の人という存在のエラさ、かなわなさを学びました。真にあこがれを含んだ、本物の尊敬の念は、どう逆立ちしてもかなわない解決力と説得力が呼び覚ます。休日は家族を放り出してゴルフ場通い、夜は酒臭い息で勉強しろ、というだけのお父さんにヒーローはつとまりません。この際、目の前で大物を苦もなく釣り上げるお兄さんこそが本物なんです。

そんな僕も晴れてオトナになり、横浜のとあるカヤック・ショップに勤めるようになりました。と、そこで僕は、じつに数多くの「大変身」を目にすることになります。タネも仕掛けもありません、ショボくれたお父さんが家族連れで休日カヤックに乗り込み、パドルを握って海に出るだけで、たちまちヒーロー誕生です。子どもはロープを結べないし、速く漕げないし、何より思うように魚が釣れません。それに引き替え、お父さんのスゴさ、輝きっぷりといったら！そう、お父さんは尊敬されて、はじめて輝けるんですね。学校に通わせてやり、塾に通わせてやり、テレビを見せてやり、遊園地に連れ出してやり、お菓子を与えてやり、ゲームを与えてやり･･･と、いくら与えたところで、誰もお父さんを尊敬なんてしません。むしろ足もとを見られ、侮(あなど)られるばかりです。ところが、ある日パドルを握りしめることで、世界は一変します。目に輝きを取りもどし、次々とヒーローに変身していくお父さんたちを見ていて僕は思いました。「お父さんって、すっごいかも知んない」海で大変身できた日本のお父さんたちなら、この世界も変えられるかも知れない、と。日本には素晴らしい海があります。世界中のどこにも負けないほど楽しい海が、それこそ、そこかしこに広がっているのです。

僕の望みは簡単です。浪-江戸には、日本の海の素晴らしさを、世界と、目の輝きを失った日本のお父さんに向けて、声をかぎりに発信して欲しい。答えはなくていい。お父さんがパドルを一生懸命に握りさえすれば、答えは海がかならず教えてくれます。そして与えてばかりのお父さんには、こう言いたい。「とりあえず海に漕(こ)いい！ 自己責任の海に漕(こ)いい！ 自由はそこにある!!」最終的には、改造した日本のお父さんを世界中の人々に見せて「日本人ってオモシレー」と言わせたいです(笑)。

Profile

Viking Kayak Japan 契約テスター。Cloud nine契約プロ。
カヤック・フィッシング探検隊初代メンバー。通称・のぶぞう。
カヤック・ショップのコーディネーター時代から「カヤック・フィッシング界の伝道師」と呼ばれる。
2008、2009、2010、2011カヤックフィッシング・ミーティング運営委員。TEAM 浪-江戸 理事。

解剖・Coast Paddlers

2012年、「海から元気になる日本」フリー・マガジン、「コースト・パドラーズ」創刊！

◆コースト・パドラーズってなんだ？

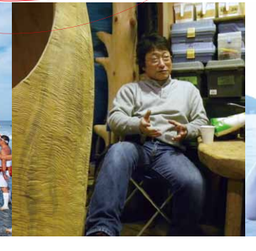
コースト・パドラーズは、海岸線のすばらしさ、海旅の楽しさを、最新のスタイルを通して「環境にやさしく」「人にちょっぴりきびしく」追求するフリー・マガジンです。日本の海岸線には、抱えきれない魅力がいっぱい詰まっています。「グルメ」「神話」「お酒」「奇祭」「温泉」「釣り」「フォークロア」「ツーリング」etc…と、これらを一挙に、ドドーンと楽しめてしまうスタイルが「カヤック・フィッシング」、「コースト・ツーリング」といった、新たな海洋レジャーの分野。私たち「TEAM 浪-江戸」が開催を目論む「浪-江戸500杯」もまた、大いに伝統を踏まえながら、一方で、これらのムーブメントに広く親しんでもらうためのシンボルとして企てた「古くて新しい」祭典なのです。

◆私たちの文明は「つながり」の文明

私たちの文明はかつて、海から生まれ、海によって育まれ、海に鍛えられて進化し、海を通して拡がりましたが、今日、どういうわけか、あたかも海によって閉ざされているかのようです。しかし思えば現前、海はそこにあります。何のことはない、私たち自身が海を遠ざけていたのです。海とつながることで栄えてきた私たちの文明が、今や海に背を向けようとしているのです。これはいけない、とTEAM 浪-江戸は思いました。どうやら私たちは、ここ何十年かの来し方を見つめなおし、意識的に、少しばかりの「冒険」を組み入れていかなければならないかもしれません。そこでTEAM 浪-江戸では、声をかぎりに海岸線の旅のすばらしさを発信し、「海の閉塞」を打ち破り、価値の再構築を通して、新たな文明の在り方を提示することにしました。テーマは「海岸線でつながる」。海と陸とのつなぎ目、既知と未知とのつなぎ目、酒と肴とのつなぎ目、ヒトとヒトとのつなぎ目が「海岸線」です。

◆つながればつながるほど融合する

スロー・スピードでゆく、すてきな冒険旅行のはじまりです。シー・カヤックという、最高にリアルなヴィークルに乗り込み、世界のうねりを実感しながら、お酒と味覚、地域と人情をつなげる旅の醍醐味を通して、人と理（ことわり）の融合、祈りと感謝の融合、恵みと戒めの融合、陸と海の融合、人文と自然の融合、文明と習俗の融合、普遍価値と固有文化の融合、美学と詩学の融合を実践・提唱・拡大し、私たちの、楽しくも美しい海岸線に還元します。



「TEAM 浪-江戸 Presents」… コースト・パドラーズは、「TEAM 浪-江戸」がお送りします。

www.nami-edo.jp

本マガジンの媒体資料、TEAM 浪-江戸、浪-江戸500杯に関する情報・お問い合わせはホームページへアクセス！

Coast Paddlers vol.00（創刊準備号） 2012年（平成24年）3月21日発行 編集発行／TEAM 浪-江戸 編集発行責任者／四方輝夫
発行所／TEAM 浪-江戸 〒150-0022 渋谷区恵比寿南3-9-23 ウィスタリアン恵比寿301 株式会社FanApp 内
無断での転載を禁ず。